

## 働く母親と「教育する家族」の多様化 —階層間格差が幼児期の家庭教育に及ぼす影響—

○額賀美紗子 (東京大学)、藤田結子 (明治大学)

### 1. 研究の背景と目的

本研究の目的は、働く母親がいる世帯において「教育する家族」がどのように幼児期の段階から構築され、その過程に親の階層がどのように影響しているかを明らかにすることである。高度経済成長期以降の日本社会では専業主婦の母親が主な担い手となる「教育する家族」が大衆化し、母親役割に対する社会的圧力が増す中で、家庭教育を通じた階層間格差拡大の可能性や母親の葛藤の増大が指摘されている (本田 2008)。しかし、これまでの「教育する家族」に関する社会学的研究は主に専業主婦層を対象としたものが大半で、働く母親の急増という近年の社会的変化をふまえた新たな知見は未だ乏しい。本研究は神原 (2004) が提示した「教育する家族」の理念型を参照しながら、働く母親がいる世帯における「教育する家族」の内実を質的データにもとづいて明らかにし、母親の葛藤状況および階層との関連を分析するものである。

### 2. データと方法

首都圏において階層上位の2地域 (地区 X)、階層中位の1地域 (地区 Y)、階層低位の2地域 (地区 Z) を調査地とした。それぞれの地域で保育園を拠点にスノーボールサンプリング方式で調査協力者を募り、働く母親 40 名 (地区 X で 21 名、地区 Y で 14 名、地区 Z で 5 名) に対して複数回の半構造化インタビューを実施した。対象者には 0 歳から 6 歳までの未就学児が少なくとも一人はいる。学歴については、母親 40 名中、四大卒以上の者が 30 名、短大卒が 1 名、高卒以下の者が 9 名である。地区 X と Y の対象者の 9 割以上が大卒であるが、地区 Z では 5 名中 4 名の母親が高卒であり、残る 1 名は自身が大卒で夫が高卒である。また雇用形態では 8 割がフルタイムである。対象にはシングルマザー世帯が 3 世帯含まれる。インタビューデータはすべて文字起こし、グラウンデッド・セオリーの視角からコーディングを行った。

### 3. 分析と考察

分析の結果、働く母親たちの間には共通して母親役割を重視し、「子ども優先・仕事セーブ」という「子どものため」イデオロギー (山田 2005) の影響を受けた語りが顕著にみられた。どの母親も仕事を調整しながら子どもの世話を時間を費やし、子どもと遊ぶ時間を大切にしている行動がみられた一方、子どもの教育への関心や教育的関わりについてはバリエーションが見出された。本研究ではデータにもとづいてそれらを、①『夫婦協働型「教育する家族」』、②『母役割偏重型「教育する家族」』、③『子どもまかせ型「教育する家族」』と類型化する。各類型では、家庭教育の方針、教育的働きかけ、夫婦間での教育的関心の共有や教育的関与の分担・協働、父親の家庭内役割、家庭外資源の動員の程度などについて違いがみられた。またその違いは、母親が経験する育児と仕事の間の葛藤にも影響を与えており、3 類型の中では『母役割偏重型』の母親が、仕事の状況についても育児の状況についても最も大きな不満を抱いていた。さらに、この 3 類型には親の階層差が反映されており、高学歴フルタイム夫婦では『夫婦協働型』、中～高学歴夫婦・母親パートタイムでは『母役割偏重型』、低～中学歴夫婦および一部の高学歴夫婦の間では『子どもまかせ型』になる傾向が見出された。当日の発表では、それぞれの類型の背後にある社会的要因を報告するとともに、幼児期から進む「教育する家族」の多様化が、母親の就労意欲と次世代の階層間格差の拡大に与える影響について考察する。

#### 【参考文献】

- 神原文子 2004 『家族のライフスタイルを問う』 勁草書房。  
本田由紀 2008 『「家庭教育」の隘路—子育てに強迫される母親たち』 勁草書房。  
山田昌弘 2005 『迷走する家族—戦後家族モデルの形成と解体』 有斐閣。  
(キーワード: 教育する家族、働く母親、階層間格差)